

# 日本看護協会 「2021年度 看多機開設準備セミナー」採録

看護小規模多機能型居宅介護（<sup>かんたき</sup>看多機）を開設予定、または検討している方を対象に、開設準備の進め方や運営のポイント、地域で活躍する看多機事業所の取組みを紹介するセミナーとして、8月27日にオンラインで実施しました。（講師の所属・役職はセミナー開催当時）



公益社団法人  
日本看護協会  
常任理事  
田母神 裕美

講演  
1

## <sup>かんたき</sup>“看多機”とは — 創設の背景、制度の概要、サービスの動向 —

4つの機能で利用者一人ひとりに柔軟に対応する「地域密着型サービス」

### 4つの機能を一体的に提供する 看多機創設の背景

看護小規模多機能型居宅介護は、2012年に創設された介護保険の地域密着型サービスです。

日本看護協会では、看多機（創設当時は「複合型サービス」）の創設を提案するにあたり、在宅医療・介護のさまざまな関係者にヒアリングを実施しました。そこで明らかになった、在宅療養・在宅看取りを困難にする要因は、「家族が介護に疲れてしまい、レスパイト的な入院が多い」「家族の不安や疲弊から、終末期の数週間を在宅で支え切れない」「生活の場に、タイムリーに医療・看護が入れる仕組みがない」「医療依存度が高い人を受け入れられるデイサービスやショートステイがない」といった切実なものでした。訪問看護や訪問介護が限られた時間に訪問し、「点」で支えるだけでは、24時間365日の在宅療養の継続は困難な現状があります。

そこで、既存の小規模多機能型居宅介護（小多機）の「通い」「泊まり」「訪問（介護）」の仕組みに、「訪問看護」の機能を付加し、看

護職員の配置を手厚くすることで、在宅療養を「面」で支える多機能サービスとして看多機が創設されました。訪問看護ステーションへの併設や小多機からの転換など、多様な事業者の参入により看多機の数も年々増加し、2021年3月時点の全国の事業所数は744カ所です。

### 柔軟なサービス提供で医療ニーズの 高い方の在宅療養継続を支援

看多機に期待される役割としては、これまでのサービスでは受け入れが困難であった医療ニーズの高い人や退院直後で状態が不安定な人の在宅療養継続支援が挙げられます。医療機器を利用されている方はもちろん、リハビリが必要な方、褥瘡などで創傷処置を重点的に行う必要がある方、認知症の方、終末期の方のケアが可能です。ご家族や介護者への支援も役割のひとつです。

また「訪問看護」「訪問介護」「通い」「泊まり」の4つの機能を利用者の状態に応じて柔軟に組み合わせることで、自立支援や重度化防止の効果が期待できます。

### 2021年度介護報酬改定で 評価された加算

2021年度介護報酬改定では、自立支援、重度化防止の取組み推進の観点から、口腔や栄養に関するケア、褥瘡マネジメント、排せつ支援等の取組みが新しく評価されました。

### 共生型サービスなど地域の ケア拠点としての取組みへの期待

2018年度報酬改定により、介護保険、障害福祉制度の双方に共生型サービスが創設されました。これにより、共生型の指定を受けた看多機は、児童発達支援や放課後等児童デイサービスなどの障害福祉サービスを提供できるようになりました。地域を丸ごと支える看多機の取組みが広がりを見せています。

※講演1の講義資料は本会公式ホームページに掲載しています。  
(<https://www.nurse.or.jp/>)

## 看多機の普及・推進に向けた日本看護協会の取組み

理解促進・  
周知普及

エビデンス  
データの  
収集

要望・  
政策提言

相談対応

「看多機の効果」を広く国民や行政にPRし、  
全国に普及促進するための政策立案を実施します。

パンフレット



看多機紹介動画



日本看護協会ホームページでご視聴・ダウンロードが可能です



Accommo. Care Service 株式会社  
代表取締役 松木 満里子氏

講演  
2-1

## 看多機事業所の開設・運営の進め方 「失敗しない看多機のはじめ方」

「どんな看多機をつくりたいか」最も重要なことは理念の明確化

事業所名	あこもけあ箱根 CASA ENFERMERA (神奈川県箱根町)
開設年月	2013年8月
職員数	看護職員7人 介護職員10人 介護支援専門員3人 理学療法士1人 作業療法士1人 事務員2人 【2021年11月時点】
登録者数	26人【2021年11月時点】
併設事業所(開設順)	訪問看護、居宅介護支援事業所、看護小規模多機能サテライト
事業所のこだわり	保養所だった建物を購入し改修。敷地が広く、短期利用や一般の方の宿泊にも対応。人が集まり、交流の場となるように、カフェや販売店の開設に向けても動き出している。

### 開設準備のポイントは 理念の共有、地域ニーズ、市町村との連携

2009年から訪問看護ステーション等を運営していましたが、「利用者のベッドを確保しておきたい」「家族のレスパイトのためのベッドが欲しい」という悩みがありました。看護の力でさらに利用者や地域に貢献する方法を模索していたところ、看多機制度が創設され、開設に至りました。

開設を考えるにあたって何より重要なことは、理念を明確にし、職員と共有することです。そして、管理者としてどのような看多機を運営したいのか、青写真を描けることが大切です。

開設準備の具体的な点ではまず、開設希望地域に、想定している利用者のニーズがあるかを見極める必要があります。あわせてハザードマップも見ておくとういでしょう。

市町村との連携も重要です。市町村が作成する介護保険事業計画に看多機開設計画が盛り込まれていない場合でも諦めずに相談し、保険者との連携を図ります。来期の計画に入れてもらえる可能性もありますし、実際、サテライト開設時には町にかけあって介護保険事業計画を変更していただきました。

開設資金に関しては、自治体の助成を受けられる場合があるので事前に確認しておきま

しょう。ただ、助成金を受け取ると、一定期間はその事業を廃止することができません。助成金を受け取る必要が本当にあるのかを、十分に検討することも大切です。

私は看多機開設時に、所在する自治体の3,000万円の助成金を申請しませんでした。別の場所にあった訪問看護ステーションを移転し併設したのですが、申請した場合、看多機が開設するまで訪問看護を行えないとのことでしたので、利用者に必要なサービスを休止することになりますし、収支の上でも必要ないと判断しました。

### 利用者の状態に合わせて運営を工夫

利用者のほとんどは、医療機関の地域医療連携室から直接紹介していただいています。地域包括支援センターやケアマネジャーに、より理解を深めてもらうため、看多機についての簡単な冊子の配布・説明なども行っています。

利用者には、想定以上の成果が出ています。要介護5で寝たきりの利用者が歩行可能になり要介護2になった事例もあり、軽快して他のサービスに移行する利用者が1割程です。

看護師としては嬉しい反面、利用者の要介護度が下がることは収入減に直結します。介護度が下がった利用者が、他のサービスに移

行しやすい流れを構築するため町に相談し、要介護1～3の方に向けたサテライトを開設しました。本体事業所では、看取りも含めて、重度の方を集中的に支援する体制をつくっています。

看多機に日中通うことで生活リズムが整い、良く眠れるようになった認知症の方もいますし、訪問を強化することで、泊まりが必要なくなった方もいます。泊まりの希望者が減少したことで職員の夜勤回数が減り、人件費率を抑えられています。人件費率は50%台です。

### 地域を巻き込み、 先を見据えた事業展開を

職員確保・育成では、積極的に学生実習を受け入れ、若手育成に力を入れています。また8050問題といわれるように、利用者の子も世代で就労経験がない方もいます。そのような方にサテライトで活躍していただき、職員確保と同時に地域の雇用促進、活性化にもつなげています。

自分たちの掲げる理念を行政・地域と共有し、巻き込んでいくことも必要です。運営の過程で必ずつまづくことがありますが、理念が明確であれば原点に立ち返ることができ、進むべき道が見えてきます。

## POINT

開設に  
向けた準備

- 何がしたいか、どんなことができるかを明確にし、法人だけでなく行政や地域を巻き込んで開設すること。
- 「予算に無理はないか?」「融資や助成金に頼りすぎではないか?」一度立ち止まり、自問してみることを。

上手いかないときは、  
無理なかじ取りは  
禁物! 続けていれば、  
必ずチャンスが来ます。



有限会社耕グループ  
統括責任者 繁澤 弘子氏

講演  
2-2

## 看多機事業所の開設・運営の進め方 「小多機からの転換」

全職員が「転換してよかった」 地域住民も力を発揮できる福祉の場

事業所名	看護小規模多機能ホーム くわのみ（岐阜県恵那市）
開設年月	2015年3月
職員数	看護職員 10人 介護職員 18人 介護支援専門員 2人 ※訪問看護ステーションとの兼務者を含む 【2021年10月時点】
登録者数	29人【2021年10月時点】
併設事業所（開設順）	認知症対応型共同生活介護、訪問看護、居宅介護支援事業所、認知症対応型通所介護、小規模多機能型居宅介護（看多機に転換）、訪問介護、定期巡回・随時対応型訪問介護看護
事業所のこだわり	高台から美しい景色を望める立地に、温もりある木造りの建物が並ぶ。 グループ立ち上げ当初から地域住民と歩み、地域を耕す活動を続けている。

### 思い込みを捨てて話し合い、 職員の不安や課題に向き合う

訪問看護師から一念発起して2005年にグループホームからスタートし、今では7つの介護サービス事業を行っています。きっかけは、訪問看護で出会った末期がんの方が、環境（人・建物・自然）が整っていれば、亡くなる直前まで心は成長できると教えてくださったことでした。「豊かな環境を提供できる存在になりたい」「地域の人誰でも出入りしやすく、最期の時までその人らしく生き、喪失の過程を共に歩める、地域の溜まり場を作りたい」と考え、当グループを立ち上げました。福祉・介護・看護事業を核に、安心して豊かに暮らせる地域づくりに貢献することを大事にしています。

2010年に開設した小多機を、2015年に看多機へ転換しました。2013年に当時の全国訪問看護事業協会事務局長の講演会で「看護の力を点ではなく、面で発揮していこう」とのお話を聞いた頃、自治体から看多機の公募があり、開設を決意しました。ところが職員から賛同を得られず落胆し、私自身も一度は諦めかけました。

しかし、「職員も自分と同じように考えるだろう」という思い込みが私にあったことに気づ

きました。経営者と現場の職員では、見ているものや考えていることも違うのだから、そこを共通認識にするプロセスが重要だと考えました。そこで全職員に対して、なぜ看多機に転換したいのかを真剣に説明することから始めました。看護職員と介護職員のプロジェクトチームを立ち上げ、職員からの不安や課題を徹底的に洗い出し、1つずつ解消するための話し合いを重ねていきました。（下記ポイント参照）

### 多方面から届いた 「看多機ができてよかった」の声

最も大きく変わったことは、事業所や在宅で看取りができるようになったことです。医療処置が必要な利用者の割合も、小多機の頃の10%から40%に増えました。

ケアマネジャーからは「入退院が増えて調整が増えた」との声がある一方、「21時に相談があっても当日23時に来所契約できたケースがあるなど、小回りがきき感謝」との感想をいただいています。ご家族からは「同じ場所、同じ職員のサービスが受けられて安心」との声が寄せられています。

当事業所で働く職員からは「訪問や送迎の人員確保ができず、日中の利用者に対応する

職員に大きな負担がかかった」「医療依存度の高い人が増え、ケアにかかる時間が増えた」との意見がありましたが、転換1年後の振り返りでは、全職員から「看多機に転換してよかった」との声が上がりました。

具体的には、「多職種で働くことで広い視野を持てるようになった」「看護職員と一緒に仕事をすることで多くの学びがあり、自信につながっている」「死生観を深める機会になっている」との前向きな声が聞かれています。

### その人が望む暮らしを 地域で支える看多機

当グループでは、地域ボランティアの方が日常的に出入りし、イベント等にも参加して下さっています。ボランティアの方が単に労働力を提供するのではなく、一緒に楽しみ、ご自身の力を発揮したり、生き甲斐を見つけられるよう工夫しています。

看多機では、最期の時まで地域の中で、その人の望む暮らしを支えることができます。看護、介護、ケアマネ、医師の関わりだけでなく、友人や地域住民との触れ合いがあり、地域とつながっていることを実感できることが看多機の魅力ではないでしょうか。

## POINT

### 看多機 開設までの 道のり

2013年

8/19

学習会  
「どうしてやりたいのか」

8/27

小多機職員会議で  
提案・意見聴取

9/18

部長会議で開設を決定

10/7

公募に応募

10/31

介護職員と看護職員の  
プロジェクト  
スタート

2014年

夏

小多機・訪問看護  
合同学習会

冬

記録様式の検討

2015年

3/30

開設



一般社団法人  
ソーシャルデザインリガレッセ  
代表理事 大槻 恭子氏

## 「暮らしとケアの可能性」

食と自然と共に、人の営み全てが  
溶け込む暮らしをゆっくり豊かに生きる

事業所のこだわり 築150年の古民家を再生。落ち着きと趣のある空間で、胸の内を語れる「語りが生まれる場」であることを大切にしている。

事業所名	看護小規模多機能型居宅介護 リガレッセ（兵庫県豊岡市）
開設年月	2017年4月
職員数	看護職員6人 介護職員9人 介護支援専門員1人 作業療法士1人 言語聴覚士1人 事務員2人 調理員2人 【2021年10月時点】
登録者数	21人【2021年10月時点】
併設事業所（開設順）	訪問看護

### 「食べるケア」で生きる力を引き出す

2025年問題を知り、病院で看護師として働いているだけでいいのか、と疑問を持ち始めました。そして、2015年から訪問看護事業を、2017年から看多機を始めました。

当事業所では、食べる楽しみを継続できるように様々な工夫をしています。耕作放棄地を利用して自分たちで作ったオーガニック野菜や、地元で作られた調味料を使って食事を提供しています。また、食欲を上げるためには環境も大事です。事業所の中庭で食事を提供すると、食欲が低下した方でも食べられることがありますし、公園で日光を浴びると、表

情や言葉が出ることもあります。医療だけに依存するのではなく、新鮮な空気・光・自然に触れ、自然治癒力を引き出すようにしています。

利用者のほとんどが看取りのご依頼ですが、看多機で過ごす中で多くの方が再び口から食べられるようになります。利用終了時の状況(2021年10月まで)は、18%の方が軽快し他サービスに移行、事業所内の看取りが46%、ご自宅での看取りが25%です。

### 人々の「暮らし」に重きをおき 地域を巻き込む

看護の視点で見守りながら、利用者の居

場所と役割を見出すことを大切にしています。地元での暮らしを事業所でも変わらず感じられるよう神社へのお参りや季節毎の調理イベントを実施し、全職員で利用者の生きる力を引き出すケアを実践しています。

また、介護事業所と地域の境界線をなくす仕掛けとしてカフェを併設し、地域の方に足を運んでいただいています。利用者との触れ合いも生まれ、自然と境界線が溶けるような交流ができています。看護とは、本来地域にあったものだと思います。人々の「暮らし」に重きを置き、地域を巻き込んでいく仕組みづくりを続けたいと考えています。



公益財団法人近江兄弟社  
友愛の家ヴォーリス  
管理者 向 美保氏

## 「最期まで寄り添いたい」

介護職員の力を引き出し、  
最期までぬくもりあるケアを提供

事業所のこだわり 浴室に天然石や檜を使うなど、利用者が「また来たい」と思えるようしつらいを工夫。地域交流にも取り組んでいる。

事業所名	看護小規模多機能型居宅介護 友愛の家ヴォーリス（滋賀県近江八幡市）
開設年月	2017年5月
職員数	看護職員8人 介護職員7人 介護支援専門員1人 理学療法士1人 作業療法士1人 食事係1人 事務員1人 ※訪問看護ステーションとの兼務者を含む 【2021年10月時点】
登録者数	24人【2021年10月時点】
併設事業所（開設順）	病院、訪問看護、訪問介護、居宅介護支援事業所、介護老人保健施設

### 人生最終章をどう生き切ったか 見届けられる関わり方

20年間訪問看護に携わる中で、最期の時をご自宅で迎えられない方がいらしたり、「介護者が休める期間があれば、老老介護でも在宅療養を続けられたのに」と思うことがありました。他県の看多機の視察を通して「やはり最期まで寄り添いたい」との思いが強くなり、在宅サービス部門の新たな事業展開として、2017年5月に開設しました。

通院での抗がん剤治療の継続が困難になり、在宅療養を希望された70代女性のケースでは、夫も要介護状態で退院直後であったため、夫婦二人で看多機の利用を開始しました。症

状の進行に伴い様々な医療的介入が必要になりましたが、病院の主治医や緩和ケア医と連携し、当事業所で創傷処置やバルーンカテーテル交換等の医療処置に随時対応しました。夫の入院時には妻は「泊まり」を利用するなど柔軟にケアプランを変更しました。最期は当法人のホスピスで永眠されましたが、夫が看多機を利用する日に面会したり、私たちも顔を見に行くことができました。人生の最終章をどう生き切ったのか見届けさせていただきました。

### 介護職員のスキルアップを支援し、 高め合える職場環境づくり

当事業所では定期的な勉強会を開き、介護職員への教育を大切にしています。特に看

り教育や在宅における介護職員の倫理などを学び合っています。また、全職員で亡くなられた方との関わりについての振り返りを行っています。この振り返りが、看護職員・介護職員の力の底上げにつながっています。

医療ニーズの高い方へのケアについては、関わりのポイントを介護職員に説明し、専門職として自信と責任を持ち対応できるよう支援しています。開設当初、経験の少なかった介護職員が今では、介護福祉士の資格を取得したり、痰吸引の研修を受講したり、スキルアップを目指しています。スキルアップを推進することは、他の職員への刺激にもなり、職種を越えて共に力を出し合うため、職場全体が活性化しています。



一般社団法人恵幸会  
代表理事 平澤 利恵子氏

## 「花巻に心(くる)ある 看護・介護を」

病気や障がいがあっても、  
地域で暮らせるよう6事業を展開

事業所名	看護小規模多機能型居宅介護 花心 (岩手県花巻市)
開設年月	2018年10月
職員数	看護職員9人 介護職員17人 介護支援専門員1人 ※訪問看護ステーションとの兼務者を含む【2021年11月時点】
登録者数	22人【2021年11月時点】
併設事業所 (開設順)	訪問看護、居宅介護支援事業所、訪問介護、 サービス付き高齢者向け住宅、企業主導型保育事業

事業所のこだわり 併設の保育園と行き来可能で、世代間交流が年中実施できる。小上がりにある窓から、子どもたちの様子が見える。

### サ高住も併設「心に寄り添い、 終の住処を提供したい」

25年間総合病院に勤めていました。退職後、2015年に訪問看護ステーションを立ち上げ、居宅介護支援を併設して機能強化型Ⅰの指定を受けています。2017年に訪問介護事業所を開設し、障がい者に対応するため共生型サービスの登録をしています。

「地域の皆様が年齢を重ねても・病気を抱えても・障がいを持っても、住み慣れた地域(花巻)で自分らしく暮らすことができるように心に寄り添い専門性の高い技術を提供します」を理念として掲げています。

看多機はサ高住と保育園を併設して2018年に開設しました。サ高住併設の理由は、看

取り期になるとサ高住から退所を迫られる事例が散見され、終の住処を提供したいと思ったからです。また、療養通所介護を運営した経験から、重度要介護者の送迎はスタッフの負担が大きいため、移動距離を短くする必要があります。同一建物減算があるものの、一定の利用者が見込めるので、事業を安定させることができると考えました。

### 「あったらいいな」を形に 共生型サービスも開始

2021年3月から看多機の共生型サービスを開始しました。訪問看護ステーションに医療的ケア児の相談が多く寄せられたことや、市内の病院が提供していた療養通所介護施設が閉鎖してしまい、利用されていた障がい者から強い要望があったからです。法人理念にも当てはまる事業だと考えています。

また、東日本大震災での経験を踏まえ、自治体と福祉避難所の協定を結び、災害時に要配慮者をお預かりできるようにしています。

「なぜ、そんなに事業を拡大するのか?」「儲かるのか?」と、多くの方から聞かれますが、大勢の方に出会い、あったらいいな、と思うことを形にしていたら、結果的に6事業まで拡大しました。おかげさまで事業開始から10年以上が経ち、黒字運営ができています。お金は後からついてくるものです。

どの地域で暮らしていても、利用者やご家族、働く人たちが笑顔で過ごせる地域になればいいなと思い、日々運営しています。

講師に  
聞く

## 看多機運営のポイント・工夫

### 医療ニーズや看取りに対応するための スタッフ教育をどのようにしていますか?

●事業所であり経験のない疾患や医療処置のある方が利用を開始するには、まず看護職員が勉強会で学びます。その上で看護職員がケアの様子を介護職員に見せながら、ケアのポイントなどをレクチャーします。

看取りが初めての介護職員に向けては、観察のポイントなどの勉強会を行います。それでも、「自分が夜勤時に利用者が亡くなったらどうしよう」と、不安になる介護職員もいます。このような時には「あなたが当番の時を最期の締めくくりの時に選んでくれたのだから光栄なこと」と伝えています。このような声掛けは大切で、その介護職員も看取りを担当することを前向きに捉え、対応できるようになりました。

また、24時間オンコール体制をとっているため、何かあれば電話でできる、サポートがあるということも大事だと思います。(繁澤)

●新卒看護師には、入職前のインターンシップで様々な処置を見てもらい、必要なスキルを1つずつ身につけてもらいます。また、看護師

としての役割や地域で暮らすことの意味など、学校で学んだ看護を生活の場で実践できるよう取り組んでいます。入職後は、一人で訪問看護を行うことに不安を持つことがあるので、ある程度看多機で経験を積んでから、訪問看護に出してもらう形をとっています。

在宅での看取り経験のない介護職員には、看護職員と2人で訪問してもらい、看護職員が行う医師との連携や家族への対応など、看取りの一連の流れを全部見てもらいます。言葉で説明するよりも経験することが大切で、まだぬくもりが残るご遺体を看護職員や家族と一緒にきれいにさせてもらう経験などを通して、看取り期のケアについて伝えていきたいと思っています。(松木)

### 職員の確保について どのような工夫をしていますか?

●ハローワークで介護職員を募集した際、事業所の理念や看取りへの取り組みを伝える資料を使って説明会を行いました。結果、2回の説明会で募集人数に達した経験があります。自分に合っていないという理

由で退職される方もいますが、理念を伝え続け、ぶれずに取り組み続けければ、理解してくれる職員は残ります。共感してくれる人も集まってきます。採用面接時に看取りも行っていることを伝えており、それでも「一緒に頑張りたい」と言ってくれる人が長く働いてくれているように感じます。(平澤)

### 医師との連携について どのような工夫をしていますか？

●当事業所は山間部にあるため、医療機関との距離が離れています。利用者の状態を共有するため、医師には事業所で導入しているセキュリティ機能が高いクラウドシステムの導入を依頼しています。

クラウドシステムは便利なので、地域の関係機関と情報共有できるツールになるとよいと思います。(大槻)

●当事業所のある町には総合病院がなく、町の診療所の医師の多くは近くに住んでいません。このような事情もあり、「医師による遠隔での死亡診断をサポートする看護師を対象とした研修会(日本医師会で実施)」を受講し、遠隔での死亡診断をサポートする体制を整えました。

今のところ、実際に活用したケースはありませんが、医師の理解・協力が深まり、夜間や緊急時の連携が取りやすくなったと感じています。(松木)

### 自立支援・重症化防止について どのような取り組みをしていますか？

●普段の生活がリハビリテーションにつながります。どのようにしたら食べられるか、歩けるか、興味を持って取り組んでもらえるか。職員全員が同じ方向を向き、声かけや仕掛けをつくっていくことが大切だと思います。そのためには、利用者一人ひとりの生活をどのように支えるか、生きてもらうかという視点を職員が持ち、皆で情報を共有することが大事だと考えています。(平澤)

●当事業所は難病の方や、がん末期の方、進行性の病気の方が多数利用しています。自立支援はもちろん大切ですが、病気の治癒や改善が見込めなくても、その方が「今日一日生きていてよかった」「今日も生きられた」という気持ちになるよう、痛みや苦しみ、辛さが和らぐような関わり方が大事だと思います。(向)

## 質疑応答

セミナー参加者から寄せられた質問に対する講師からの回答をご紹介します。

### Q 看多機と訪問看護を一体的に運営する場合、 看護師はどのように配置していますか？

A ●看多機事業所内でも訪問看護でも、同じ看護師の顔が見られることこそが、看多機の醍醐味と考えているので、固定配置にせず、日替わりでシフトを組んでいます。基本的には看多機は2人体制ですが、緊急時や急な新規カンファレンスが入った場合には、その日出勤している早番シフトの職員で調整、対応しています。大変な面もありますが、揺るがずにこの体制を続けていきます。(平澤)

●非常勤の看護師2人は訪問には行かず、看多機事業所内で通いの対応をしています。その他の看護師は兼務していて、日替わりで担当を変えています。訪問看護を担当する日だったとしても、ある時間帯だけ看多機に入るなど、臨機応変に動いています。看多機の看護師が訪問看護も担当することは、利用者にとって安心感があると思います。(向)

### Q リハビリテーションのニーズにはどのように 対応していますか？

A ●看多機で作業療法士を1人雇用しています。機能訓練ではなく、レクリエーションや遊びを通して普段の生活を快適にする働きかけをお願いしています。ポジショニングや福祉用具の選定の際にも活躍してもらっています。(向)

●訪問看護ステーション勤務のリハ職が看多機でリハビリを行う日を設けています。リハ職の訪問件数は少なくなりますが、看多機でのリハビリニーズに応えられるだけでなく、介護職員のリハビリに対する理解も深まります。(平澤)

### Q 黒字経営と職員の業務負担軽減を両立させる にはどうしたらいいでしょうか？

A ●看護が利用者の状態をきちんとアセスメントすることにより、サービスの追加が本当に必要か見極める必要があります。利用者の潜在的な生きる力を引き出していくことで状態が良くなるので、結果的に黒字経営になっていくように思います。  
あとは記録や会議などを見直し、無駄を省くことも大切です。(松木)